

棒にし探したが職がなく二日間は終った。二十九日、ようやく運輸省の出先機関である運輸省第一港湾建設局酒田港工事事務所の小使として採用が決り、勇躍、帰宅をした。

昭和二十一年九月三十日より出勤し、その日が、人生行路、再出発の記念すべき日であった。勤務箇所は工事の現場監督する事務室で、当役所では見張所と称していた。業務内容は、朝の掃除から始まり、便所、倉庫等の清掃、水道施設が無いため、二〇〇メートル位先の建設省事務所からの貰い水運搬、その他、事務所と他の見張所間の書類送致等が主であった。かなり苦勞の多い仕事であったが、家族の生活を思い耐え忍んで頑張り通したのである。業務も約一年で石材検査係へ転じ、後、倉庫係となり、二十三年十一月十五日付傭人工手の辞令を受けた。二十五年には技術員工手、二十七年四月一日付で事務員に任命された。三十年四月には、運輸事務官へ昇任することが出来た。在職中一度だけ、管内事務所を統轄する、運輸省第一港湾建設局へ転動した。又酒田の事務所へ舞い戻り、昭和五十三年に退職したのである。

今この長い人生行路を振り返るとき一度は戦争により丸裸となったが、延四十数年の長い役所生活を無事過して来たのも、上司、先輩、同僚のご指導とご協力の賜であり、心から感謝するものである。

昭和五十四年十月から当地、遊佐町選挙管理委員会に選出され、二期目は昭和五十八年十月から委員長に選任された。遊佐町の一行政機関の重大な責務を果し、昭和六十二年十月同職を退職し現在に至るものである。

父と娘との絆

兵庫県 山崎 虎藏

私は昭和二十年九月二十四日、朝鮮の北端、新義州の刑務所に侵入したソ連軍の手によって、平安北道警察部員と、新義州警察署の日本人警察官百余人が逮捕されて収容された。

これは八月七日北鮮に侵入したソ連軍が、私たち警察官を、軍人同様に戦闘員と見なして、その労働力を自国

の復興に利するため、シベリヤに送致するための作業の犠牲者となるためである。

国乱れて忠臣いず、家貧にして孝子現わるという諺があります、これが真実となつて表現されましたので、日本民族未だ亡びずと思ひました。

沖繩陥落後第二線の防衛陣地として、濟州島の防備は、満州や朝鮮の要塞の重火器が取り外されて行われたので、す。

連日京義線の鉄道の貨車に、高射砲や戦車大砲の天幕をかけた武器が、夜も昼も、南へ南へと、何百輛と送られるのを、鉄道輸送警備に当たっていた警察官にはわかっていました。

八月七日ソ連軍の侵入は、全く無防備の背後を襲われたもので、関東軍も朝鮮軍も全く丸腰で、独逸軍から捕獲した優秀な七十二連発のマンドリンという自動小銃、米国から贈与されたジープを始め、戦車や機関銃を装備したソ連軍に立ち向かえるはずはありません。

やがて新義州も戦場化し、鴨緑江の中洲の新義州の街は、火の海と化すことを予想しまして、定州という山岳

地の街に、妻と長女と次女を疎開させ、私と長男十四歳とが新義州に止まり、防備に当たる覚悟でした。

新義州の街や、定州の街は、新京から着のみ着のまま引揚げてきた関東軍将校の夫人や子供たちがあふれて、その上満州や支那から引揚げる朝鮮人や日本人の避難民で、ごった返していました。

八月十五日の終戦により、日本人在留民に対する迫害は甚だしくなってきました。高級軍人、高級官僚が、全く無力化してその対応策がなくなったとき、これに代つて日本人の防衛策を最小限度に食い止めるため、在留日本人を組織し、抵抗体を運用活動した下級官吏や、民間人が出現して、わずかに治安が保たれつつありましたが。

そんな背景の中に、わずかに十八歳の少女である私の娘の貞子が、疎開先で病身の母を元気づけ、十二歳の妹を励ましながら、混乱の列車に乗り、新義州駅に夜中に引返して帰って来ました。

日本人の大人たちが、呆然自失の状態の中に、ブラウスの腕をめくり上げ、胸を張って、堂々と母と妹を護つて、新義州駅の待合室に、朝鮮人の多い雑踏の一隅に悠

然としてゐる貞子を出迎えに行つて見付けた私は、無事でよかつたという喜びと、娘に対する感謝の念でいっぱいであつた。

私たち日本人の怖れは、ソ連兵の女たちに対する暴行である。そのため男装させたり、隠れることを娘に勧めたが、一向に聴入れなくて、母をハラハラさせていた。

大和撫子として潔よく散ればよいと、心に深く死を決しているようであつたので、私はそれが気にかかつていた。

十一月十日、私たち警察官が五十人、新義州駅から平壤に、ソ連兵に押送されるときのできごとがある。

夫に父に一目逢いたい、差人物の弁当や煙草を渡したいと願う警官の夫人や子供たちが駅頭に集まり、夫に渡したいと懇願するのを、ソ連兵は銃を擬して近寄らせずに、私たちを貨車に押込んで乗せてしまった。

妻や子供たちは、失望のあまりに、駅のホームに坐り込んで、大声で号泣して、その声は遠い貨車の中の私たちの耳を、約一時間は貫いていた。誰も妻の心づくしの弁当を手にはできなかった。

日没後は外出禁止の街である。夕方になって、駅の構外から大声で、お父さんお父さんと叫ぶ一人が頭にネッカチーフで包んだ洋装の女性がいた。それが私の娘であることを知つて、急に私の胸は痛んだ。

見れば弁当を高くあげて、私に渡そうとしているではないか。命の危険を冒しても、父に弁当を渡したいという、熱烈な父を想う優しい心根には感動したけれども……。もしソ連兵に撃ち殺されては大変と、思わず私は、早く帰れ、危ないぞと叫んだ。

拳銃を突きつけていたソ連兵は、怖れず近寄る可憐な娘のパパと呼ぶ態度に、さすがのソ連兵も心を動かされた見え、娘の差出す弁当を一応検査のうえ、私に手渡してくれたのであつた。

のり巻きずし、おにぎり、手巻煙草の紙に、お父さんがんばれ、貞子、輝紀、京子と、愛する子供たちの名が連ねてある。

貨車の中で、私だけが、娘の勇氣ある行動による差入れ弁当を手にすることができたのである。こんなうれしいことはない。弁当を開いたとたんに、涙が滝のように

流れて出た。

娘は夕暗の街の中に、弟と二人消えて行った印象が次に待ち構えていた苛酷な条件の抑留生活の脳裏に蘇り、生きる力を与えてくれた。生への執念は、全く娘の愛情と勇氣に支えられたとしみじみ思う。

二十一年七月七日、私は栄養失調の身体を、博多の国立病院に横たえて、歩行も不能の状態であった。それなのに、病院では、午後入院したのに、夕食も与えないので、夕食を要求したが駄目であった。ただ看護婦が私の私物ですと、乾麵包を一包くれたのみで、待遇は全く悪く、臨床の復員軍人の見舞客の女性から、握りめしをもらって、飢えをしのいだのです。

ちょうどその時、新義州にいた娘は、夜中、コックリさんに占いを立て、父の安否を占ったところが、お父さんは「病氣」、「ふくおか」に居ると出たので、お父さんの病氣が治るように、神様にお祈りしましょうと、母と弟妹たちに勤めて、いっしょに神に念じたという話を、十一月になって娘が無事朝鮮から引揚げて再会したときの話でわかった時に、父と娘との心の結びつきが、なん

だか目に見えぬ絆で結ばれていると感じた。

引揚げによって財産は失ったが、家族との信頼は深まって、得たものは大きいと思う幸せの日々である。

引揚者体験の一断面

岐阜県 下條 美 武

私の父、下條喜多造（本籍瑞浪市日吉町七八八番地、明治十四年三月三日生）は明治三十四年徴兵され、明治四十一年十月朝鮮駐留衛戍病院付きとして大正三年十一月迄勤務し、その後慶尚南道金海郡で営農を続けた。

このため私は韓正竜山水道町衛戍病院官舎で出生した。昭和七年釜山公立中学校を卒業し同時に徳頭公立尋常小学校組合書記となる。昭和九年十月六日満州国司法大臣官房文書科雇員として採用された。昭和十三年四月一日司法部属官兼新京地方法院書記官委任三等の発令を受け、同科で防諜及び審査係長を勤めた。昭和十四年六月一日北辺振興工作の一環として中央各部より若干名が各省に